

I 分野 第4分科会

進路・学力保障

司会 相原 信也 正井 秀紀

記録 南 知宏 井本 泰

報告Ⅰ 矢田 隆宏 (阪神)

幼小中連携を基にした小規模校における進路保障について

報告Ⅱ 藤本 進一 (東播磨)

基礎基本の定着

～さまざまな体験を通して～

報告Ⅲ 高木 健作 (県神戸)

長商は人づくりにあり

研究討議の概要

<報告Ⅰについて>

司会 今の取り組みについて何か質問はあるか。

南淡路 小学校の児童数は80人ほどだが、部活の関係で周辺の中学校に抜けていくという問題があり、中学校の廃校・再編が決まっている。校区外申請で抜けることは西谷でもあるのか

報告者Ⅰ 人の住まないエリアが北部と南部の間にあるため、校区外へ抜けるのは難しい。

三木 三木も複式があるなど少人数のところが多い。幼小中連携の話はずいぶん前からあり、こどもたちの連携、教師の連携、カリキュラムの連携の等話し合いを進めてきた。

朝来 2小1中だが、やはりあがってくる生徒は1クラス。小中連携については、義務教育学校など話が進みやすい環境だが、小学校同士の連携はどのようにしているのか教えてほしい。

報告者Ⅰ 校務分掌が多く、子供と向き合う時間もなかなか確保できない。他の学校と何かをしようという余裕はなかなかないのが現状。

三木 中学校を卒業したあとの進路選択に課題があったように思うが、その点について、中学校と話し合うということはあるか。

報告者Ⅰ 人権教育の中学校区ごとの研究会の中で、幼稚園と保育園を含め、授業を公開して行なっている。学力向上のため、中学校も頑張るが、小学校がやはり大切なので連携してやっていきたいという話になっている。生徒が面接でうまく答えられない事例については、「授業で発表させている？」と尋ねられ

る。ただ、現状の話が中心で、中学校や小学校でどうしていこう、というところまでは行けていない。

司会 発表資料の中に、「(地域とのつながりも含めて)子どもたちの育ちを大切にしている」とあるが、このあたりをもう少し話してもらえるか。

報告者Ⅰ 部落差別の現実の中から学んで、人権教育のブロック別の研究会をやってきたが、ここでは、仲間づくりの分科会と、基礎基本の学習や生活習慣などを基本軸にして話し合っ、今の課題や、授業の様子などを話し合いながら、これからの授業でこんなことをしてみたらという課題だとか、中学校ではこんなことがあるので、小学校、こども園でも注意して見てほしいといったことをやっている。

司会 小学校が終わったら次は中学校、という進路保障ではなく、小学校こそが真の進路保障だ、という考えで取り組んでいるという実践発表だったが、これについては、最後の討論でもう一度取り上げたい。

<報告Ⅱについて>

司会 ご質問をお持ちの方はお願いしたい。

和田山 ボランティア活動をとおして、学習面や生活面を身につけさせるという話があったが、具体的にどういったボランティア活動を、どれくらいの期間行うのか。

報告者Ⅱ 夏休みのボランティア活動は、生徒が自分で日にちを決め、時間を決めてやっている。多い生徒でも、2、3日間だが。普段さまざまなボランティアの要請が学校にもくる。

和田山 その後何か変化はあったか

報告者Ⅱ アンケートをとったわけではないが、全校発表の様子を見ると、何を学んできたのか見て取れる。緊張している中、挨拶してもらったのがとても嬉しかったと言っている生徒、ボランティア先で決められた時間、与えられた役割をやっている様子を見ると、普段学校では見られない表情が見えてくる。

新温泉 家庭学習の時間が短いという指摘だが、本校でも同様の生徒が見られる。SNSや動画、テレビやゲームなどに時間がとられている様子がうかがえるが、そちらでは、原因についてどのような分析をしているか、具体的な対応策があれば教えてほしい。

報告者Ⅱ 原因については特定できないが、家庭での学習時間をもっと確保していければ、学力も伸びていくだろうね、という話をしている。

丹南 本校では反転授業という名前で、予習活動を行なっている。これは、予習動画をアップして、それを見てきたものとして授業を組み立てる方法。丹南中のホームページに概要がアップしてある。

宝塚 全体でも話があるといいのだが、進路保障について大切な学習の一つが、統一応募用紙の問題だろうと考えている。

司会 皆さんの学校地域では、統一応募用紙の問題はどうだろうか。

出石 希望学級の中で触れる。これは毎年やっている。同和地区以外の生徒についても、人権学習の中で使うことがある。

丹南 毎年3年生が卒業前に、おかしいことに気づく力ということで、統一応募用紙と結婚について取り上げている。丹波同教で意見交換した時にも、皆やっているということであった。

司会 差別を見抜き克服する力ということがテーマとしてとりあげられているが、皆さんの地域でそのような例があれば、お聞かせ願いたい。

長田商 9月から就職試験が始まった中で、先生の時代は父母の名前をかかなければならなかったという話をした。今の履歴書からは、自分に関係する部分以外がなくなっているのを見て、解消されつつあることを改めて感じた。

三木 質問用紙や面接の内容が、就職差別なのかどうなのかということに気が付くかについては、中学の終わりなどでしっかりとやっておくべきことだと思う。大学生になって就職しようという時に、初めて見ても14項目に抵触するのかなどわからない。エントリーシートでダイレクトにやりとりすると、本人が気づいて訴えないと表に出てこない。

<報告Ⅲについて>

司会 ご意見、ご質問をいただきたい。

三木 定時制ということで、生徒さんたちは、働きながら通学しているのか。

報告者Ⅲ アルバイトをしながら通学している生徒は60%~70%で、30%~40%程度は家からの通い。働きながら学ぶという定時制の様子とは若干違う印象で、いままで中学校で勉強することができなかった生徒が、本人のペースで、無理せず続けられる場所という意味で価値があると思っている。

南淡路 小学校、中学校、高校はお互いをもっと知る必要があるのではないか。定時制の状況がわからな

い人がたくさんいるという現状を、なんとかしていかなければならないのではないかな。

報告者Ⅲ 中学校との連携は本当に大事だなと感じている。本校では、ゆっくり、あるいはマイペースで勉強できるということがもっと中学校に伝われば、さらにニーズを掘り起こすことができるのではないかな。普通科や工業科に比べて商業科は選択されにくいので、パイプを広げながらやっていきたい。

篠山 高校を卒業できなかった生徒の話があったが、在学中の様子や先生が取られた声掛けなどを教えてほしい。

報告者Ⅲ 進級ができない生徒が去年は1人いた。規定の欠席日数に達してしまったので転学していった。学校に来ないことを責め立てるような声かけになってしまったのが悔やまれる。試験は簡単にしてやることができるが、出席はどうにもならない。その子に対して思いがあるのなら、他の先生方にもアドバイスをもらいながら、関わり方を考えることができるのではないかと、今の学校で学ばされた。

宝塚 最後の生徒たちの声を読ませていただいて、先生の思いが伝わってきた。小中学校で登校しなかった子、引きこもって人間関係を断ってきた子、小中学校が全然楽しくなかったという子、先生の学校が大切な居場所だったという子、こうした生徒の思いを受け止めていただける先生たちの重みというものをつくづくと感じさせられた。

司会 他に意見はあるだろうか。せっかくなので、まだお声を聞いていない先生方、お話をいただければ。

西宮 西宮は進路保障の方は、幼稚園、小学校、中学校、高校に、職安も加わって考えている。1番の問題は、退学、進路変更の問題。アルバイトのシフトに入れたら、テスト前でもシフトをはずしてもらえない、アルバイトで疲れ切って学校を休んでしまい、出席日数が足りなくなるケースがある。社会の仕組みの問題、経済の問題だと思うのだが。高校の先生方、そんな質問を受けませんか？

報告者Ⅲ シフトが入ってという話を聞いたことは確かにある。ただ、こちらも事業者とも相談しながら、なるべく早いうちに行事予定を出して空けてもらうようにしている。

宝塚 進路、学力保障をするのは教師だけなのか、地域の協力あってこそだし、行政の後ろ盾も大切である。宝塚北部の小学校の廃校はないが、南部の小学校は少子化の影響で消えていく。地域と学校がお互い

に支え合う姿が、真の学力保障ではないかと思う。

総括と今後の課題

初めて兵庫県人権教育研究大会中央大会に参加させていただいて、小、中、高、それぞれの校種で様々な取り組みがなされており、頑張っておられることがよくわかった。こうした会を通してお互いが連携しあって、兵庫県全体で取り組んでいくことができれば強く思った。

それぞれのご発言のベクトルが相手にではなく、自分に向かっている、自分のことを話しておられるというのが特に印象に残っている。ご自身が、職場や地域の仲間とともに関わっておられる現場からの声を聴くことができたことが何よりであり、非常に大切なことである。

報告Ⅰ「幼小中連携を元にした小規模校における進路保障について」では、文字を学ぶことは未来を拓くこと。学校と家庭、学校と地域が連携して子供を育てていくという取り組みが、さらに発展していくことを予見させる取り組みであった。進路保障は、「同和教育の総和」と呼ばれている。子どもたちの未来を保障するためにも学力保障は欠かせない取り組みである。その取り組みに校種は関係がない。また、全体討議のなかで、「統一応募用紙の問題」が指摘された。進路・学力保障を考えていく上で非常に大切なことであり、今後さらに深めていきたい。

報告Ⅱ「基礎基本の定着～さまざまな体験を通して～」では、家庭学習の時間の短さに関連してSNSの話が出た。LINEを見ないと落ち着かない。既読がつかないと落ち着かない。返信が早く返ってこないと落ち着かない。これは自己承認の欲求の表れだと考えられる。その一方で、ボランティアによって得られる自己有用感、「自分は誰かの役に立っている」という自己効力感、そして自己肯定感の話があった。

報告Ⅱは、ボランティアを通して人とつながったり、人から認められたりするなかで、自分が自分であることを誇りに思って生活していくということを実践する取り組みだといえる。報告者の勤務校は、校長や教頭といった管理職が細やかに職員に心配りをしてくれる学校だという話があった。だからこそ、その職員文化の中で生きる職員は、生徒たちに細やかに心配りをしているのではないだろうか。ひいては、心配りのできる生徒を育てる土壌になっているのでは

ないか。「ボランティア活動やさまざまな体験を通して、学ぶことや身に着けることが多い」とレポートにあるが、まさにこのことだと言えるだろう。

報告Ⅲ「長商は人づくりにあり」で出た生徒の感想に関する話のなかの、次の2つの言葉に注目したい。

「(引きこもりという経験を経て) この学校(長田商業高校)で久々に友達ともめるというできごと(を経験できたこと)は、これからの私の人生にとってとてもよい経験になったと思う。」という言葉の重さを考えたい。不登校や引きこもりということを考えていくうえで、この言葉は、非常に大切なことだと考える。人とつながらなければもめることはない。人とつながることによって初めて「もめる」という状況に出会うのである。「もめる」ということを自分で引き受けられるようになったという意味で、この生徒は大切な居場所を見つけたのだと感じた。

「忘れたものを取り戻す」という言葉もあった。これは、文字を学ぶことで未来を拓くということ。この言葉は、識字学級や学力の問題、さらには未来を切り開く生きる力とつながっていく。文字を学ぶことは学力、ひいては生きる力とつながっていくのである。

最後に、この分科会では、「部落差別の現実学ぶ」という言葉が幾度となく交わされた。この言葉を各自現場に帰って、よりいっそう深め追求したい。教師自らが学び、保護者や地域の皆さんと手を携え取り組みを進めていくことを誓い合うとともに、多くの学びと課題に気づかせていただいた3名の提案者の皆さんに拍手を贈りたい。